



TITLE:

ナチス社會主義に於ける労働觀

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. ナチス社會主義に於ける労働觀. 經濟論叢 1940, 50(1): 62-78

ISSUE DATE:

1940-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131342>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第卷十五第

月一年五十和昭

論叢

波動內在性の分析……………文學博士 高田 保馬

東亞綜合體の原理……………經濟學博士 谷口 吉彦

時論

華興商業銀行券の機能……………經濟學士 徳永 清行

研究

ナチス社會主義に於ける労働觀……………經濟學士 中川 與之助

ドイツ封建制_{末期に於ける}保險機構の變容……………經濟學士 佐波 宣平

下請制工業に於ける最近の變化……………經濟學士 田 杉 競

聖トマスの法と愛について……………經濟學士 澤崎 堅造

說苑

財閥的大コンツエルンに就て……………經濟學士 大塚 一期

附錄

彙報

外國雜誌論題

研 究

ナチス社會主義に於ける勞働觀

中 川 與 之 助

は し が き

茲にナチスの所謂勞働とは勞働者 (Arbeiter) の勞働のみを指すのではない。勞働者の勞働は勿論根本的に重要であるが同時に企業家・技術家・藝術家・學者等の所謂精神的勞働をも亦含める。ナチスは好んで「創造的人間」(Die schaffende Mensch) といふ語を使用するが、それは肉體を主とするにせよ精神を主とするにせよ兎に角何らかの創造・給付をなす人々を意味し廣い意味での勞働者と同義に使はれてゐる。ナチス社會主義に於ては總ての人が國民共同體に奉仕・貢獻すべきことを道德的に要請せられる。従つて又總ての人は「創造的人間」であり廣い意味での勞働者でなければならぬのである。かれらはかれらの黨を「國民社會主義的獨逸勞働者黨」(Nationalsozialistische Deutsche Arbeiter Partei) と名ける所以も亦之によると説明する¹⁾。ナチスが勞働を如何に高く評價してゐるかは之を以ても察せられるであらうが吾人は更に何が故にかくの如く勞働を高く評價するに至つたかに就て考究

1) A. Holz, Nationalsozialistische Arbeiterpolitik S. 6.

をしてみやうと考へる。

一 世界觀の變革と政治の轉換

社會民主主義時代を支配した思想はマルキシズムである。而してマルキシズムの基本理論は唯物主義であり階級闘争史觀に立つものなるが故に物質を繞る階級と階級との闘争が激化されていつた。企業は資本家にとりても勞働者にとりて單なる私利獲得の機構と考へられ、資本家は出来るだけ利潤を大ならしめん爲に勞働を搾取せんとし、勞働者は又出来るだけ資本家的搾取から免れんとして勞働を回避せんとした。かゝる物質本位や階級本位や闘争主義は言ふまでもなく勞働者をして勞働は苦痛であり犠牲であり強制でありと思はしめ社會的には勞働者は賃銀奴隸 (Lohnsklaven) であるとさへ考へられた。各經營が階級闘争の機構と化し勞働に對するかやうな觀照が社會を支配してゐる場合に企業活動が萎靡收縮するのは當然であり、各經營が萎靡收縮する場合に國民經濟が沈滞してゆくことも亦自然の歸結である。社會民主主義時代に勞働を蔑視嫌忌するに至つたのは獨りこの階級對立觀からのみではなく、かの唯物主義も亦大なる役割を演じてゐる。マルクスの唯物史觀は物質的な生産力を社會進歩の根本動力と觀た。而して社會の物質的生産力はそれに相應する一定の生産關係——從つて又その總體關係たる社會の經濟的構造——の下に行はるゝものであり、その生産關係が生産力の發展と矛盾するに至れば亦自ら變革されてゆくものではあるが、一つの社會構成はそこに發展する餘地あるすべての生産諸力が發展してゐない内に破滅することは決してなく、また新しい一層高級な生産關係は、それらにとつての物質的生存條件が舊社

會それ自體の胎内に孕まれないうちに出現することは決してない²⁾のである。かやうな理論は人々をして社會的機構の前には個々人は如何にも無力なものであると觀ぜしめ、經濟法則・社會法則の支配には何を以ても抗すべからざるものであるといふが如き宿命觀を抱かしめるに至り、殊に勞働階級にはかの頽廢的な自暴自棄的な所謂「プロレタリア」根性を扶植していつた。かやうな宿命的な頽廢的な思想が奮闘心や努力心を滅殺し勞働精神を鈍らせ勞働を輕蔑するに至つた。加之、唯物主義は精神的なるものを否定して精神的なるものも亦物質的なるものゝ反映であり翻譯であるとなすに至つては人々は物質的なもの・外的なものに至し價值を認めて内的なものや觀念的なものを輕んじ創造とか工夫とかに對する熱意が全く失はれていつた。以上の如き階級闘争や唯物主義が勞働を嫌惡せしめ輕蔑せしめ社會の生産力を著しく減退していつたのに、他面に又この階級主義や唯物主義は人間の幸福は物質にありとの立場から、勞働階級をして出來るだけ多く社會的生産物の分け前に與らしめよといふ要求を大にしていつた。減退せる生産に對して分配の増加といふことは大なる經濟的矛盾であるがそれが社會民主主義の導いた結論であり、獨逸經濟を沈滞沒落せしむるに至つた所以である。この不甲斐なき且つ慘憺たる祖國の經濟及び社會狀態をみて驟起せるのがナチスである。ナチスは獨逸をしてかくの如く疲弊混亂せしめた根本的疾患はマルクスの世界觀なりとし、之を民族を互壞せしむる「思想的毒素」として排撃すると共に新に民族的世界觀 (Die Volkische Weltanschauung) を以て之に代へた。それによれば人類生活の自然的な且つ基本的な形態は民族としての生活である。民族は血縁的に條件づけられ且つ神によりて意圖せられた現象であり、民族を離れた個人や階級の存在はありえない。民族は生物的な自然的な生活單位であり個人も階級も民族としての宿命から免れ

2) マルクス、經濟學批判序文參照。

することは出来ない。人類の歴史を觀れば民族と民族との不斷の闘争史である。「地上に於ける凡ての生活と生成 (Werden) とは闘争の法則に従ふ」³⁾ものであり、この點に於て人間は他の植物や動物と何等異らぬしそこに又神の深慮が存する。されば徒らなる平和主義は民族を死に導くものである。ゲルマン民族は生きが爲に且又民族の權利の爲に自由の爲に名譽の爲に闘はねばならぬ。民族は本質に於て正に闘争共同體 (Kampfgemeinschaft) なのである。かの世界大戰の苦き經驗の如きも世界の改造は觀念や道徳によりては到底解決されないことを教へた。されば獨逸民族が生きが爲に民族が一體となつて闘争するの外方法がないのである。凡そかやうな世界觀の變革は政治に大なる轉換を與へたことは又當然であらねばならぬ。前述の如き唯物史觀をとる社會民主主義時代の政治は自ら經濟に支配さるゝの外なかつた。換言すれば政治が經濟を支配するに非ずして反對に經濟が政治を支配した。蓋し唯物史觀によれば經濟が社會の眞實の基礎であり政治はその上層建築 (Überbau) に過ぎず、經濟や經濟法則から自由なる政治はありえないからである。政治が經濟に拘束されそれに支配されるといふことは政策即ち國家意志の無力を意味するものに外ならない。唯物史觀は獨り國家意志を弱めしめたのみならず又同時に人々の意志を弱めしめたのであるが、これらは相俟つて國民の勞働意志を消磨していつた。前時代の政治が國民の勞働意志を消磨したのは之のみに止らぬ。更に社會民主主義が政治の任務を階級と階級との調和をはかるといふ所謂階級政策 (Klassenpolitik) にありとなすに至つて更にそれが助長された。蓋しかゝる妥協政策は資本家階級と勞働者階級との何れをも亡さざると共に又その何れをも充分に生かさざるものなるが故である。勞働階級の勢力の據頭につれて資本家階級の利潤が漸次減少するに及んで、彼等は企業に對する熱意を失ひ、營利の爲に奮闘努力

3) P. Blankenburg u. M. Dreyer. Nationalsozialistische Wirtschaftsaufbau und seine Grundlagen S. 213.

するよりも寧ろ退いて安易なる年金生活をなすに如かずとなすに至り、かくて資本家にも勞働者にも仕事に對する生氣は失はれ社會に年金病 (Rentensierne) が瀰漫して理想がなく、人々は消極・退嬰となり勞働や創造の努力が全く滅殺されてしまつた。⁴⁾ ナチスが社會民主主義國家を中立國家 (Neutraler Staat) といふのもかゝる妥協的・退嬰的な政治の行はれしことを指すのである。

ナチス革命はかくの如く經濟に支配される所謂經濟時代 (Ökonomischer Zeitalter) を克服して政策時代 (Politischer Zeitalter) に入つた。ナチス主義では政治的價值が最高でありて經濟・社會・文化等一切の價值を支配する。前時代に於ては經濟が人間にとりての宿命であつたが新時代に於ては「政治が國民の宿命である」とされる。かゝる政治觀の下では最早經濟に政治は隸屬せず逆に政治こそ經濟を指導し創造すべきものである。かの自然法則の如く不可抗力的なものとして國民に君臨する經濟法則の如きはありうべきでない。國民の爲めの經濟であつて經濟の爲の國民ではない。かやうな國民のための經濟を創造することこそナチス社會主義の任務である。⁵⁾ ナチス時代の政治觀が創造や努力を強調していつたのはかやうなわけであるが、民族的全體主義から生まれる道德的要請が更に又之を助長した。民族が存在するといふことは生ける一の統體であることを、そしてそれは民族としての意志を有つことを意味する。各個人はこの全體意志たる民族意志を構成すると共に又それが支配をうける。凡そ個人が生くるといふこととはかゝる民族の肢體として生くることである。民族はその本質に於て「政治的民族」(Politischer Volk) であり政治的意志の遂行者である。而して民族が民族として政治的使命を果さんには多くの任務を有する。外に對しては不斷の闘争をなさねばならぬし内に於ては國民の福利の爲に多くをなさねばならぬ。これら内外に

4) A. Hesse, Einführung in das wirtschaftliche und soziale Verständnis der Gegenwart. S. 13-18.

5) 拙著、ナチス社會政策の研究、p. 159-160.

對する民族としての任務の遂行はいふまでもなく民族を構成する各個人の貢獻に俟つの外ない。各個人が民族の意志を我が意志と觀じて之が實現の爲に努力する場合に民族は榮えるが然らざる場合は没落する。されば各國民の全體に對する愛・犠牲・給付が民族共同體の基本道德である。民族共同體は愛の共同體であり犠牲共同體 (Opfergemeinschaft) であり給付共同體 (Leistungsgemeinschaft) であり意志の共同體 (Willensgemeinschaft) であることを自覺した積極的な努力と貢獻こそ民族興起の基礎であるとナチスは説くのである。之を要するにナチスに至りてその世界觀により更にはそれに基く政治觀によりて舊時代の如き勞働や創造の輕蔑や回避・嫌忌は排せられて政治的に或は道義的に勞働や創造が著しく高く評價せらるゝに至つたのである。

吾人は以上ナチスの政治的立場よりする勞働の評價を述べた。その際政治的價值が最高であるといふ原理よりして自ら經濟や社會や文化の領域にも及んだが、以下更に項を分ちてこれらの諸領域に於ける勞働觀の變化を述べよう。

二 經濟領域に於ける勞働の重要性

既に述べたる如くナチスの經濟は政治に奉仕すべきものである。さて然らば經濟が決定的に支配をうけるナチスの政治的目的は何かといふに、ナチス黨の綱領第一條に掲げし如く「民族自決權に基づき總ての獨逸人を糾合して一大獨逸國を建設せんとする」にある。而してこの大目的を達成せんには差し當り今日の獨逸を抑壓してゐるヴァイルサイユ及びサン・ゼルマン條約を破棄し(黨綱領第二條)、更には民族の給養と過剩人口の移住の爲に土地

(植民地)を獲得せねばならぬ。(黨綱領) 乍併かやうな對外的要求は今日の不條理なる世界機構を以てしては容易に認められうべくもない。されば獨逸人がこの不當なる國際的壓迫をはねのけん爲め鬭争を開始せねばならぬ。獨逸の自由・權利・名譽は唯鬭争によりてのみ回復しうる。國民文化は政治的自由と獨立とに保存するものなるが故に政治的自由の獲得には暫く何物を犠牲とするも亦やむをえない。⁶⁾ かやうな對外的民族政策はナチスをして政權獲得と同時に準戰時體制をとらしめたのであるが、世界戦争による經驗は今日の國防或は戦争は最早武力のみの鬭争に非ずして「民族と民族との戦争」(Krieg Volk gegen Volk)であり總力戦(Totaler Krieg)なるべきことを教へたが故に、ナチスは國民生活のあらゆる領域を國防的見地から再組織した。就中「經濟なき國防力は考へられず」「經濟は國防力と同價值なる鬭争手段である」となし國防經濟(Wehrwirtschaft)を非常に重視するに至つた。而して、國防經濟の任務は極めて廣汎であるが歸する所國民經濟の生産力の問題であり國民の勞働の問題である。「總力戦は最早軍人のみによりて行はれるのでなく工場の勞働者・田園の農夫・兒童の母親等も亦本質的に之に参加する」のである。ナチスが對外政策・國防政策からみて勞働を如何に重要視するに至つたかを知るべきである。

嗣つてナチスが勞働を重要視するに至れるは獨り國防政策の見地からのみではない。ナチスは對内政策の指標を「國民生活標準の向上」「福利の増進」にありとなす。⁷⁾ 乍併この國民福利政策の實現には前政權時代の失政の跡に鑑みて分配政策よりも生産政策を確立せざるべからずとなすに至つた。蓋し生産しうる以上のものを分配しえざるが故である。かくてナチス政權の下に於ては經濟政策も社會政策も何れも生産第一主義をとるに至つた。かゝる對内政策の轉換は生産の根本としての勞働を尊重するに至れるは當然にて、給付の向上(Leistungssteigerung)多く

6) A. Hitler, *Mein Kampf*, S. 266-7.

7) A. Weber, *Allgemeine Volkswirtschaftslehre* S. 107 及び P. Blankenburg u. seine *Grundlagen* S. 212.

の業績 (Meinleistung) といふことが經濟界の標語となるに至つた。以上對外・對内政策の何れに於てもナチスは勞働に大なる價值を認めざるをえず「勞働と勞働者を尊敬せよ」(Ehret die Arbeit und Achtet den Arbeiter) とか「ナチスは勞働者の國家である」とか「行績 (Merk) と行動 (Action) の社會主義である」とかいふに至つたのである。

さてナチスによりてかやうに重要さを置かるゝに至つた勞働の性格・本質を更にかからの理論によりて説明せんに、(1) ナチスでは經濟は政治に奉仕する「政治的經濟」(Politische Ökonomie) であるから、經濟の細胞をなす各經營 (Der Betrieb) も亦この國家的・政治的使命の擔當者である。經營がかかる使命を擔當せんには又當然にそれを構成する企業家も勞働者も政治的使命の爲の共働者でなければならぬ。「經濟の爲の經濟」とか「利己の爲の經營」はありえない。如何なる勤務にも勞働にも政治的使命と責任が托されてゐる。總ての人は政治的目的に副ふ様に自己の勞働を適用すべき道德的義務を負はされる。従つて勞働を規律するものは資本家的經濟法則に非ずして政治的原則である。而して觀念的・理論的には勞働を與ふるもの (Anweisung) は企業家に非ずして國家であり勞働者は國家からの勞働の受領者 (Arbeitnehmer) である。勞働と勞働者とはかくの如くにして政治化されて來た。(2) 勞働は今や社會的・國民的な共同資源でありて個人の私すべきものでなくなつた。民族共同體に於ては一切をあげて全體の爲に公益の爲に捧ぐべきものであつてそれを無視して私益に委ねべきでない。殊に勞働の如き一國の生産力を決定する根本的な資源は特にその社會性・公用性が重大視せられる。かくして勞働に對して一方には共同體的立場から多くの道德的要請——例之、勞働への意志 (Wille zur Arbeit)・勞働の義務 (Pflicht zur Arbeit) 給付の増加 (Leistungssteigerung) といふが如き——がむけられ、他方には制度として勞働の育成・訓練・保護・

配給等が規定せらるゝに至つた。各種の經營規定・勞働管理官・信任協議會制度・勞働奉仕制その他各種産業上の勞働規定の如きはこの現はれである。勞働の公益性・社會性から出發して廣汎なる勞働の管理がナチス勞働行政の一大特色をなす。今日のナチス國家では總ての勞働はいはゞ管理勞働である。(ハ)資本主義の下では經營は資本家の爲の利潤造出の「技巧的な裝置」(Kunstvoller Apparat)であり、勞働者は營利の手段として雇傭せらるゝに過ぎない。勞働者の價值は資本家にとりては利潤的價值であつてそれ以上ではない。⁸⁾即ち資本家と勞働者との間には精神的・人格的な關係はなくして利己の爲に互に他を自分の手段として機械的に結合してゐるのである。かやうな關係に於ては正しくマルクシズムの教ふる如く勞働は商品であり勞働者は賃銀奴隸であらう。然るにナチスの精神革命はかやうな考を一變せしめた。ナチスによれば總ての國民は民族共同體の爲に奉仕すべき道義的存在であつて「野卑な利己」(Büßreife Ichsucht)の爲の存在ではない。個人は個人以上のものであり階級は階級以上のものである。總ての人は精神共同體の一肢體として共同體的人格(Gemeinschaftspersönlichkeit)の運載者(Träger)として共同體的任務を擔當すべき名譽と責任を負ふ。勞働者は勞働者となる前に既に國民(Staatsbürger)であり國民的人格である。國民社會主義の下では國民に非ざる勞働者や人格なき勞働者はありうべからざるものである。而してかゝる國民的思想や理念を具現するものこそ實に勞働である。勞働は精神の創造であり人格の表現であり如何なる勞働も人格と無關係でありえない。かくて今日に於ては自由主義時代のイデオロギーの生んだプロレタリアー(Proletariat)としての勞働者や「賃銀奴隸」は存せず勞働が商品として取扱はるゝが如きことはいふまでもなく許すべからざることゝせらるゝに至つた。ナチスによれば勞働は自由であり祝福(Segen)であり歡喜(Freude)で

8) O. Mönckmeier, Jahrbuch der nationalsozialistische Wirtschaft. S. 24.

ある。ナチス社會主義はあらゆる勞働力の搾取を防がんとするにあると説く。⁹⁾ (二)從來の資本家的經濟に於ては資本が萬能であつて勞働が資本に支配された。資本がなくては勞働は創造されず勞働なくしては勞働者には生きる術がないにしてもそれはやむをえざる「經濟法則」・「自然法則」の命する所であるとせられた。乍併かやうな「經濟法則」に囚はれる限り經濟が永遠に人間を占有して人間が經濟を占有することは不可能である。若しこの「經濟法則」が不可避免的な自然法則として人間を支配するものとなれば没落に瀕せんとする獨逸民族を救ふ道がない。獨逸民族が生きんと欲せばこの經濟的桎梏から脱れ出ねばならぬが、それには先づ人々の思想を信仰的に支配してゐる經濟の宿命觀をたち切らねばならぬ。かれらはいふ。「資本が勞働を作り出すといふ資本主義的觀念は抽象的なものである」¹⁰⁾。「人間は思惟する以前に呼吸する。それと同様に人間は經濟を行ふ前に勞働する」¹¹⁾のである。「勞働は總ての經濟に先行する」¹²⁾。資本が勞働を創造する唯一の基礎であるが如き考へ方は資本家制度に於ける思惟である。吾等の信條によれば「仕事は仕事を創造する」(Work creates work)。國民的創造の前には或は國民的生の前には「經濟の爲の經濟」とか「宿命としての經濟」はありえない。先づ國民を經濟に結ばねばならぬ。經濟があらゆる創造能力ある人の給付 (Leistungsgemeinschaft) として再組織されねばならぬ。抑も「經濟とは勞働組織であつてそれ以外のものではない」¹³⁾。それを資本の組織の如くならしめたるものは自由主義でありそれに拘泥するは個人主義・資本主義に囚はれて國民共同體の如き人間を中心とする「人間經濟」(Menschenökonomie)を知らざるものであるとなす。ナチスのかやうな經濟觀の變革は勞働を資本以上に根本的なものとなし所有することよりも勞働することにより大なる社會的評價を置くに至つた。然し乍らナチスは資本や財産を蔑視するかといふにそ

9) Jens Fessen. Volk und Wirtschaft. S. 94-5.

10) 11) 12) 秋澤修二譯、ナチスの哲學と經濟 p. 113-115.

13) 秋澤氏譯、前掲書、p. 115.

うではない。資本は過去の勞働の所産として又新しき勞働の手段として尊重することは勿論である。要するにナチスによれば勞働ありての資本であり人間の爲め國民の爲の資本であつて、かの資本に獨自の不可侵的法則の存する如き資本主義的觀照を排したのであり、この意味に於て資本を經濟の王座より下して之に代ふるに勞働を以てしたといひうるであらう。

三 社會的見地よりの勞働觀

經濟的見地よりの勞働の重要性並びにその性格は上述の如くなるが、それと同時に勞働の社會的評價や性格も亦大なる變化を遂げた。蓋しナチスに於ては經濟は民族の爲め國民社會の爲めのものであるから、經濟の本質を構成する勞働は勿論國民社會のものであり社會的關係と切り離すべからざるものである。勞働を社會的見地より眺むれば、(1)勞働に社會的貴賤がない。抑も民族共同體は既に述べたる如く勞働・給付の共同體であり、總ての個人がその有する能力を以てそれに貢獻すべき道德的の義務を有する。而して共同體の立場からみれば總ての個々人の提供する給付や勞働は共同體にとりての必要なる總勞働の配分であり割當である。共同體の爲めの經濟や勞働に不必要なるものがありうべきでない。されば各人の勞働は悉く必要勞働であり勞働の種類・場所・地位等によりて社會的に毫も貴賤の區別が存すべきでないのである。若し夫れ勞働に貴賤ありとせばそれは勞働そのものに非ずして勞働をなす者の精神的態度 (Geisteshaltung) に決せられる。即ち高き共同體的人格によりてなされたる勞働は低きそれによりてなされたる勞働よりも高く評價されねばならぬ。精神の共同體に於ては物的な業績よ

りもそれがなされたる性格や精神がより重要であると主張される。蓋し共同體の發展は物質によりてなされず精神によりてなされるとなすが故である。要するに勞働者の精神的態度によりて勞働の質に上下を生ずると雖も勞働そのものに本來的貴賤がないのである。次に(□)國民共同體に於ける勞働には階級性がない。共同體に於ては勞働はかの資本と共に全體の爲に最も合理的に利用さるべき共同資源である。従つて又かゝる全體的立場からは當然に勞働が一部の階級によりて、例之、資本家階級の爲めとか或は勞働者階級の爲めに私有私用せらるべきものでない。かの階級闘争時代にみたる如き資本家による勞働の搾取とか勞働階級による勞働の管理とか或は勞働の全收權 (Recht auf den vollen Arbeitstrag) などは認めらるべきことでない。勞働は階級闘争の具に供せらるべきものに非ずして國民全體の爲めの勞働となつたのである。更にナチスでは(ハ)勞働は物ではない。既に經濟に於ける勞働觀に述べし如く、勞働は精神の表現であり人格と切り離すべからざる關係をもつ。「勞働者は勞働力の保有者としてのみならず同時に又國民 (Staatsbürger) である。¹⁴⁾ 従つて彼は勞働の保護のみならず人格の保護をうけねばならぬ。かくして新時代には人格の保護として勞働の自由・勞働の名譽・勞働の權利等の外、賃銀問題や住宅問題が重要な社會政策の課題となつて來た。最後に述べべき重要なことは(ニ)ナチスに於ては、勞働は職業的身分 (Berufsstand) を規定する。國民共同體は一の生ける統體でありそれは一の家計をもつ。即ち生命體としての共同體が生きんには有形・無形の多くの生産がなされねばならぬ。而してこれらの生産は農工商その他各種の産業によりて行はれ、それらの産業は更に多くの人々の勞働―職業―によりて營まれてゆく。されば國民共同體の産業には自ら一定の體系があり又従つて國民の勞働・職業にも一定の體系が成立するのである。國民共同體はこれら

14) W. Schumann und L. Brucker, Sozialpolitik im neuen Staat. S. 230.

の組織・體系を自覺して計畫的・合理的に之を運営しやうとする。ナチス經濟は今日の所かのロシアの如く私有財産や自由交換及び市場價格の構成を排除した中央集權的な計畫經濟(Planwirtschaft)ではないが、交通經濟を全體的立場から統制せんとして産業部門のみならず勞働をも統制するに至つた。而してこの勞働統制の原理となつたものは實に身分思想(Standische Gedanken)である。ナチス身分思想によれば人々は職業によりて各異る身分を取得する。國民共同體の成員は各々一定の職業勞働に従事するのであるが、その職業が産業によりて種類・性質を異にするはいふまでもなく、同一の産業に於ても人々の擔當する職能によりて勞働の種類性質を異にする。かくて或人は農民的身分を又他の人は工業的身分を獲得し又或人は企業指導者となり或人はその從屬者となる。而してこの擔當する勞働の相異が社會的身分を規定し各々にその職能を遂行するに相應しき社會的地位・階級を與へる。人々の各異れるかやうな職業的身分は職業をして營に經濟的な給付の結合であるのみならず社會的な給付の結合たらしめるのである。ナチス身分思想では總ての人は産業と職業の體系に編入せらるゝと同時に社會的身分秩序に編入せらるゝ、共同體の立場から社會は階級をもち昔日の如き個人の機械的平等であるとか階級の平等といふことはなくなつた。ナチスの社會は身分社會であり經濟は身分經濟であり勞働は身分勞働である。

三 文化上よりの勞働觀

ナチスに於ける文化政策の基調は新しき民族共同體を建設する爲の共同體的文化を創造することにある。抑も獨逸をして今日の窮狀に陥れしめしものは一には國民が外來的な個人主義や唯物主義に囚はれて民族的な自覺を

失つたが故である。されば獨逸民族の共同體を建設せんには何よりも是等の外來思想を一掃して本來の獨逸的なものに復らねばならぬのであるが、その獨逸的なものこそ正しく共同體なものである。ゲルマンの古代を顧みると吾等の祖先は家族の・血族の・民族の立派な共同體生活を營んでゐたことを知る。¹⁵⁾ この共同體的なゲルマンの本質をこそ今日に蘇生すべきものである。かくして始めてゲルマンはゲルマンの文化を有つに至るのであると説く。さればゲルマン的な文化の創造といふことが文化政策の指標でありそれに向つて國民精神が總動員される。而してかやうな創造が勞働精神と一致するはいふまでもない。ナチスに至りてかやうな文化の創造政策が精神的・肉體的勞働を強調して來たのは蓋し又當然といはねばならぬ。

右の如くナチスが新しき文化政策の指標をゲルマンの共同體的文化の創造に置き、その創造の必要を大いに強調してゐるのであるが、同時に又彼等はゲルマン・ネンにかゝる創造の能力のあることを力説する。即ちゲルマンにとりてはかゝる共同體的文化を創造すべきであるのみならず又それを優に創造しうる。故に國民は國民自らの力に目覺めよといふのである。彼等は説く。(4) 創造の根本は精神にあるがゲルマン民族は本來精神的な民族であつて過去に於ても多くの秀れた藝術や科學を創造して來た。西歐的・猶太的思想は唯物思想を説くがそれでは人の精神の自由は失はれて物質に隸屬し物質的な必然の世界のみとなる。ナチスの信條は之と異り神を信じ神の創造力を信ずる。「民族は神の創造し給ひしもの」であり従つて「又吾々同胞は神の子である。唯物主義は精神を以て物質の顛反となせども」物質的な組織は精神的感覺の結果であり、「精神こそは創造的要素」(Schöpferische Element)であるとなす。「凡ての創造は人間の深底にある超人間性の發露である」啓示とか靈感といふことは之を

15) 拙著、前掲書、p. 110.

16) W. Sombart, Deutscher Sozialismus 蘇波氏日本譯 p. 181-188.

意味する。獨逸の歴史の生んだ偉人をみても敬虔とか信仰が常にそれにつき纏うてゐる。「ナチス運動は獨逸國民を自由ならしめん偉大ならしめん爲に神によつて興へられたものである」。國民社會主義は新しき創造であるが神に對する信仰は必ずやそれを成就せしめるであらうと説く。¹⁷⁾ ナチスは更に(□)獨逸人は活動的であり現在を肯定する傾向を強く有し活動力と活動欲とを有する。之は過去の歴史にあらはるゝ幾多の英雄・詩人・藝術家の傳記にさては戰爭に軍隊に農民に又近くは十九世紀の獨逸經濟の勃興に窺ひうる所である。フイヒテも學者の任務に關する論文に「行爲すること行爲すること之が我等の任務である」と叫び、ニーチエも「獨逸人はあるものでなくして生成するものであり獨逸人は發展する」と述べてゐる。「獨逸人が形而上學的であると同時に活動的であること、即ち獨逸人が觀想と自己觀照とに於てのみならず、行爲に於てもまた神に近づかうと努力する」に於て他の活動的民族と異なる特色を有する。強き意志の力、高き義務心や犠牲心を尊ぶのも亦この行動的國民の本質を示すものであるとされる。¹⁸⁾ 要するにゲルマン的共同體文化を創造せんとするナチス文化政策が創造を強調し、精神的勞働に高き價值を置くことは右で明であらうが、創造といふ點に於ては肉體勞働も亦精神勞働と同様に高く評價せらるべきものであり、廣き意味に於ける勞働精神がナチス文化政策の基調をなしてゐるのである。

結

言

吾人はナチス社會主義の下に於ける勞働觀をかなり詳細に述べ來つた。人々は之によりて今日の獨逸の勞働觀が社會民主主義時代に比して如何に大なる變化をなしてゐるかを知りうるであらう。即ち前時代には勞働は卑め

17) 拙著、前掲書 p. 167-168.

18) W. Sombart 前掲書、日本譯 p. 188, p. 178-180.

られ嫌忌せられ回避せられたのに、新時代には勞働は共同體的義務であり權利であり名譽であり歡喜であると考えられ、勞働と勞働者とは社會的に非常に尊重せらるゝことゝなつた。かやうな角度の轉換は如何にして起つたかといへば根本的には世界觀の變革にある。唯物史觀や階級闘爭論は抗爭的・頽廢的所謂プロレタリア意識を生んだが、民族の共同體や闘爭史論は總ての個人や階級に全體的・共同體的性格を扶植して全體への奉仕・給付・勞働を本然的な義務であり且つ名譽であると考へしむるに至つたのである。かくて今や個人主義的な報償や収益の爲の勞働は存せず全體の爲の必要勞働の擔當として働きうるものは働かざるべからずとなされ、以前には階級闘爭の機構と化してゐた經營は「企業指導者」と「從屬者」との「勞働共同體」・「給付共同體」と觀ぜられるに至つた。その結果生産力が著しく發展して來たことは事實として認められ、次から次へと強硬な外交政策を遂行して來たのも「社會平和」(Soziale Frieden)「勞働の平和」(Arbeitsfrieden)に基づく生産力發展の賜である。ナチスが政權獲得後短年月の間にかくも大なる轉換をなし終せた政治的能力には敬服すべきものがあるが、吾人はかれらの勞働政策や理論には猶幾多の根本問題の横はるのを見通しえないのである。これを詳細に述べるのは他の研究に譲るが、試みに若干の點を指摘するならば、ナチスが勞働の價值を高く評價してその公共性や社會性及び人格性を強調し、之を階級的利益或は搾取の具に供すべからずとなすが、私有財産は廢せられず社會的にみれば依然として有産者・無産者の對立が存在してゐるのであり、且つ企業は營利即ち資本家的利潤を基準として營まれてゐるのであつて、ナチス共同體が「經營共同體」・「勞働共同體」等の名を以て階級が解消したり又は階級的恣意・搾取の餘地が全然なくなつた如く説くならば現實に反する。觀念としての共同體が現實化さるゝには更に幾

多の道程を辿らねばならぬのである。況んや資本家的イデオロギーの殘滓が新しき「企業指導者」に多分に殘されてゐる可能性あるに於てをやである。次に之と關聯するが、ナチスは階級的利己主義を排斥すると共に社會的な機械的平等主義をも斥けて、新に身分的社會秩序をいふに至つた。之によれば、各勞働者は「經營指導者」に従屬するものとして身分的社會秩序に編入されるのであつて、新しき少數の「勞働貴族」は別として大部分の勞働者若くは無產者の身分は半永久的に固定せらるゝことになる。然もかゝる身分を決定するに至らしむる根本はもと資産の有無にありとせば、社會民主主義時代とは異なる形に於て階級の對立は存續するものとみななければならぬ。即ち身分的秩序が純粹に人々の能力によりて自然的に構成せられてゆく秩序ではないのであり財産が寧ろその規定者なのである。以上の如き根本問題は殘されてゐるのであるから、勞働の倫理も人々の積極的な實踐となつてゆくには民族共同體の實質が、更に發展してゆかねばならぬであらう。

ナチスの共同體は民族主義に基き且つ自由主義的經濟の基礎の上に立ちてそれを共同體的に運營せんとした所に特質がある。而して共同體的運營の理論には幾多の創造があり發展があるのであるが、自由主義的制度の殘滓が拂拭されるには更に新しき政策的努力を要するのである。それは兎に角ナチスの勞働觀は一の共同體的勞働觀の型を教ふるものであるのみならず、現階段に於けるナチス獨逸の勞働政策を理解すべき基礎をなすものである。